

# 飛鳥藤原第100次調査（大極殿院東方の調査） 現地説明会資料

奈良国立文化財研究所  
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

## 1 はじめに

奈良国立文化財研究所は1969年（昭和44）以来、飛鳥・藤原地域を対象として、発掘調査を継続して実施してきたが、今回、調査次数がちょうど100次を数えることとなった。

調査の対象は、藤原宮（694～710年）の中心部分に近い内裏地区の一郭で、大極殿院の東にあたる。この場所では、かつて部分的に調査が行われている。一つは1939年（昭和14）～40年にかけて日本古文化研究所が行った調査で、ここでは、朝堂院の北面回廊と東面回廊の交点を明らかにしている。もう一つは、今回の北に接する場所で1970年（昭和45）に行われた奈良国立文化財研究所による第2次調査で、その結果、今回の対象地で大規模な礎石建物を確認している。

今回は、そうした成果を踏まえながら、今後の周辺整備の参考とするためにも、広範囲を調査することによってこれを検証し、なお新たな知見を得たいと考え、東西46m、南北45mの2070㎡の発掘区を設定した。調査は7月上旬に開始し、現在なお継続中である。

## 2 主な遺構

検出した遺構は、大きくは次の5つの時期に区分できる。①古墳時代、②飛鳥時代、③藤原宮直前期、④藤原宮期、⑤平安時代以降である。ここでは、③と④について報告する。

この時期の主な遺構として、朝堂院の回廊、大規模な礎石建物の他、内裏外郭南辺の掘立柱塀、条坊道路の側溝などを検出した。

### 【藤原宮期の遺構】

朝堂院回廊：発掘区の西南部で検出した礎石建ちの複廊で、北面回廊を東西方向に7間分確認し、直角に南に折れて東面回廊となる。両回廊とも、柱間は桁行4.2m（14尺）、梁間3m（10尺）である。礎石は7個残るが、原位置にあるのは3石のみで、それ以外は落とし込まれているか、もしくは抜き取られている。礎石は花崗岩で、上面を平滑に加工しているが、造り出しなどはない。

朝堂院回廊の規模は東西約230m、南北約320mと復元されているが、今回の調査によって、東西幅は235mとなる。回廊造営にあたり整地を行っているが、回廊本体に伴う基壇については痕跡が残っていない。柱位置から約2m外側では雨落溝を検出した。内側雨落溝、外側雨落溝ともに幅約1mで、溝の埋土上面に瓦片が大量に埋まっている。東面回廊の外側雨落溝は、真っ直ぐ北上し、発掘区外へのびる。

掘立柱塀1：朝堂院回廊の東に接続する掘立柱東西塀で、7間分検出した。内裏外郭の南辺を画する塀となる。柱掘形の一辺が1.5～2mと大きく、柱間は3m（10尺）。内裏外郭の規

模は南北378m、東西305mとなる。

礎石建物：発掘区の西北部にある礎石建ちの東西棟建物で、建物の東半部を検出した。礎石位置を18ヶ所確認し、礎石も9個残るがいずれも原位置から動かされている。礎石据え付け掘形は径4m近い巨大なもので、まず全体を掘り下げて栗石を入れてつき固め、その後礎石位置を掘り下げて根石を入れ、その上に礎石を据えている。礎石はいずれも大きく、1トンを越える。回廊の礎石と同じく花崗岩で、造り出しなどはない。建物は身舎の四面に廂が付き、桁行7間もしくは9間、梁間4間の東西棟に復元できる。柱間は桁行・梁間ともに4.6m(15.5尺)であるから、東西32.2mもしくは41.4m、南北18.4mという大規模な建物になる。基壇などは残っていない。

建物の南北の中心から北面回廊の中心までの距離は80尺(23.6m)となり、建物の東側柱と東面回廊の西側柱の柱列が揃う。建物の名称や機能は不明である。

【藤原宮直前期の遺構】

藤原宮の直前期と見られる遺構として、多くの溝および掘立柱塀などがある。

南北溝1・3・5および東西溝1・3：発掘区東半部を南北に流れる溝のうち、南北溝1と同3がセットとなり、南で直角に折れて、それぞれ東西溝1と同3となる。また、東西溝3には南北溝5も接続する。南北溝1と同3はともに溝幅1.2m、深さは南北溝1が30cm、同3が50~70cm、南北溝5は幅1.0m、深さ50cmある。東西溝1は屈曲点のためか溝幅が若干広がっている。南北溝3と同5、東西溝3からは多数の瓦が出土し、南北溝5と東西溝3からは、建物造営の際の加工木片が出土した。南北溝3と同5の西には溝と平行する掘立柱塀2と同4があり、それぞれの溝と同時期と推定できる。

南北溝2・4および東西溝2・4：前記の溝群と平行してL字状に流れる溝で、重複関係からみて、これらの溝の方が古い。南北溝2・4は幅1m、深さはいずれも20~30cmをはかる。東西溝2・4は幅1.5~1.8m、深さは40~60cmある。溝に含まれる遺物は少なく、土器と瓦片が若干出土するのみである。南北溝4の西にある掘立柱塀3も溝と同時期であろう。

東西溝5・6・7：発掘区南端近くに3条の東西溝があり、いずれも朝堂院回廊の雨落溝よりも古い。東西溝5は幅60cm、深さ70cmで、南北溝6が接続する。東西溝6と同7はともに南肩が未検出のため、正確な規模は不明である。重複関係から、これらの溝は東西溝6→5→7という順序で掘削されたと考える。最も新しい東西溝7は、1m以上の深さを持ち、発掘区外に大きく広がる規模の溝となる。大極殿北方で検出した宮造営に関わる運河に匹敵する可能性が高く、その解明は今後の調査にゆだねたい。

溝群の時期変遷：以上に述べた溝群は、重複関係・出土遺物・位置関係などから見て、次のような時期変遷を考えることができる(5頁参照)。

I	II	III	IV
南北溝2・4 東西溝2・4 東西溝6	⇒ 南北溝1・6 東西溝1 南北溝3 東西溝3・5	⇒ 南北溝5 東西溝7 .....→ .....→	⇒ 回廊雨落溝

このうちⅠ・Ⅱ期の溝群は、その位置関係、および、周辺の成果を考え合わせると、藤原宮造営に先立つ条坊道路の側溝と判断できる。岸俊男復元藤原京の呼称でいえば、Ⅱ期の南北溝1と3が東一坊々間路の東西両側溝で、東西溝1と3は四条大路の北側溝にあたる。これとセットになるのが東西溝5（南側溝）で、この間が四条大路である。東一坊々間路の幅は溝心々間で7m（20大尺）、四条大路は同じく14m（40大尺）ある。

一方、Ⅰ期の南北溝2・4、東西溝2・4・6はそれらよりさらに古い道路の側溝となる。つまり、宮に先行する条坊道路が付け替えられていたことが判明したのである。古い方の道路幅は、東一坊々間路が溝心々間で5～5.5m（15大尺）、四条大路は約18m（50大尺）となる。

Ⅱ期につくられた溝のうち、南北溝3・5および東西溝3・5から出土した瓦には、礎石建物所用瓦も多く含まれるから（後述）、これらの4条の溝については藤原宮期まで存続した可能性がある。そうだとすれば、東西溝5との関係から見て、朝堂院回廊の造営はそれより遅れることとなる。

### 3 主な遺物

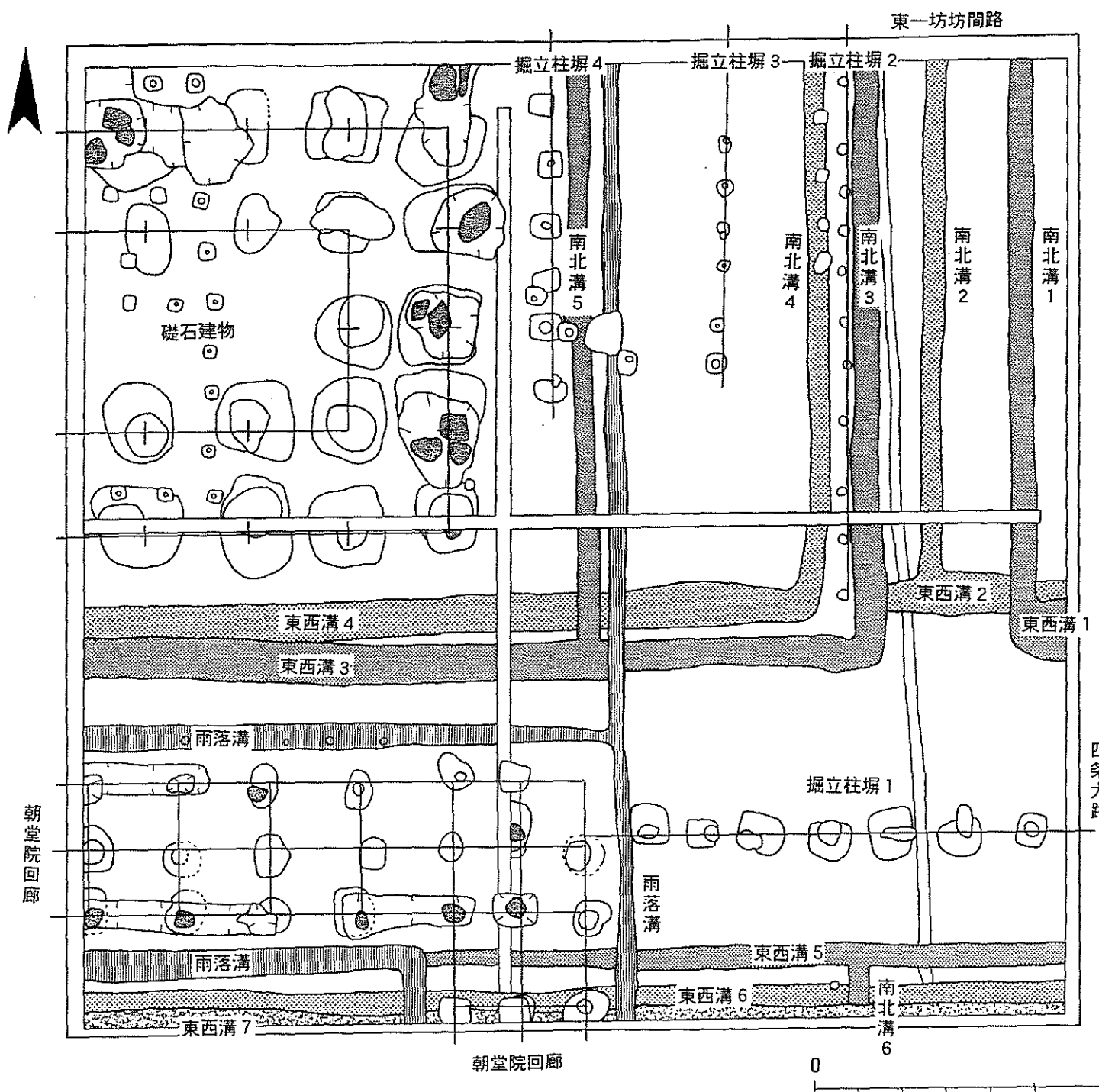
出土遺物は瓦と土器が殆どである。特に瓦の出土量が極めて多く、軒瓦に限っても300点を越える。これは、主として藤原廢都後に周辺に葺かれていた瓦を一面に廃棄したためであるが、前記の4条の溝からも顕著に見られる。瓦が多く分布していたのは、朝堂院回廊部分と礎石建物の東の一帯であり、それぞれの所用瓦が反映していると見られる。

軒瓦は図示した4つの組み合わせが中心となる。このうち、出土地点などからみて、6275A-6643Cのセットが主として礎石建物に葺かれた瓦、6233Ba-6642Aのセットが朝堂院回廊の所用瓦と推定できる。特に前者の瓦は、南北溝3・5、及び東西溝3・5などから多く出土している。

### 4 まとめ

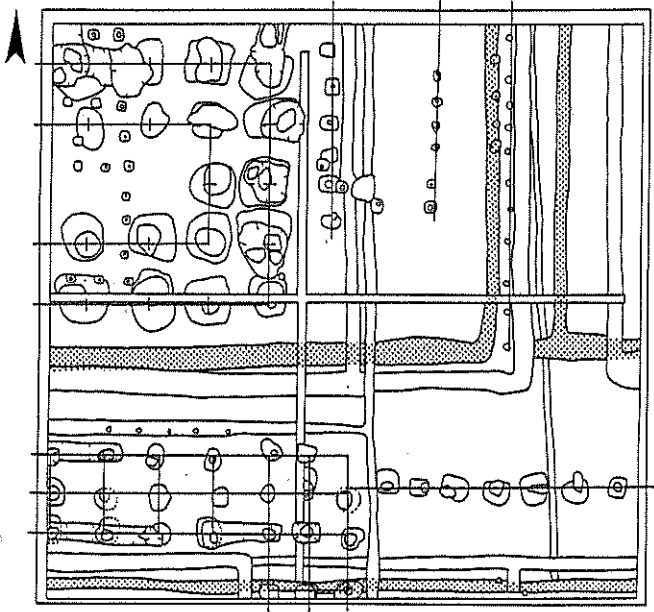
今回の調査成果は以下の通りである。

- ①藤原宮期の遺構を再確認した。新たに内裏外郭南辺の塀や回廊の雨落溝を検出したのみならず、従来の調査によって、存在が知られていた朝堂院回廊および礎石建物についても、礎石据え付け掘形などを精査し、柱位置を正確に把握できた。日本古文化研究所の調査は測量の精度という点でやや問題があったが、今回の調査は今後の周辺調査の基点となる。
- ②宮内の先行条坊を検出した。条坊が想定される位置に、東一坊々間路と四条大路を検出した。ただし、今回は、これらの条坊道路の付け替えが行われていることが新たに判明した。付け替えの時期とその理由、あるいは付け替えがこの付近に限られるのかどうか、などはいずれもこれからの検討課題である。
- ③朝堂院回廊の建設は若干遅れるか？。先行条坊側溝のうちの一部は藤原宮期まで存続したとみられ、朝堂院回廊はそれを埋めて造営されていることから、同回廊は礎石建物などよりも時期が下る可能性が出てきた。この点も、今後検証すべき大きな課題となる。

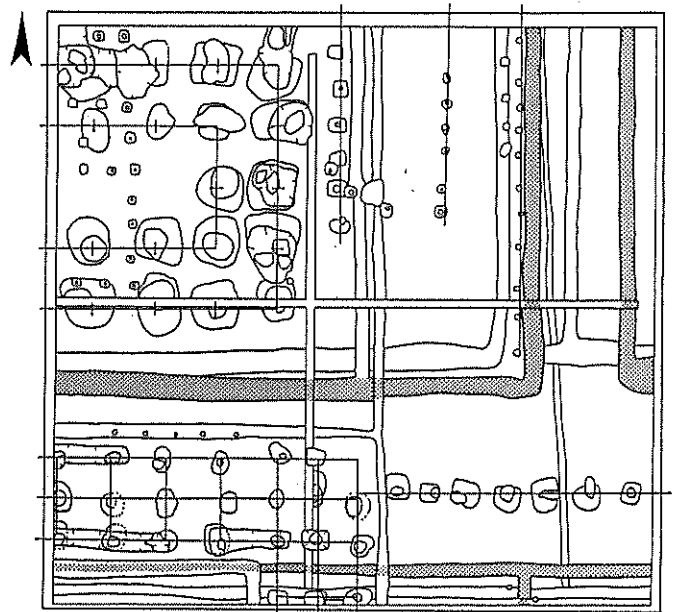


飛鳥藤原第100次調査  
遺構図

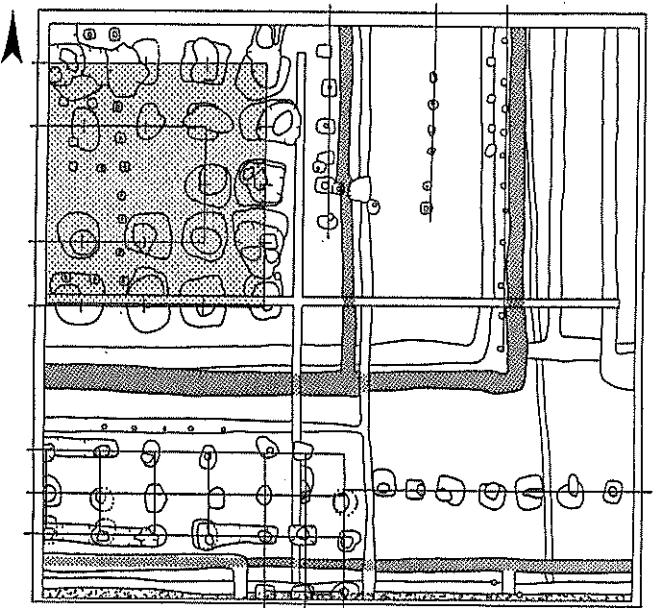
I



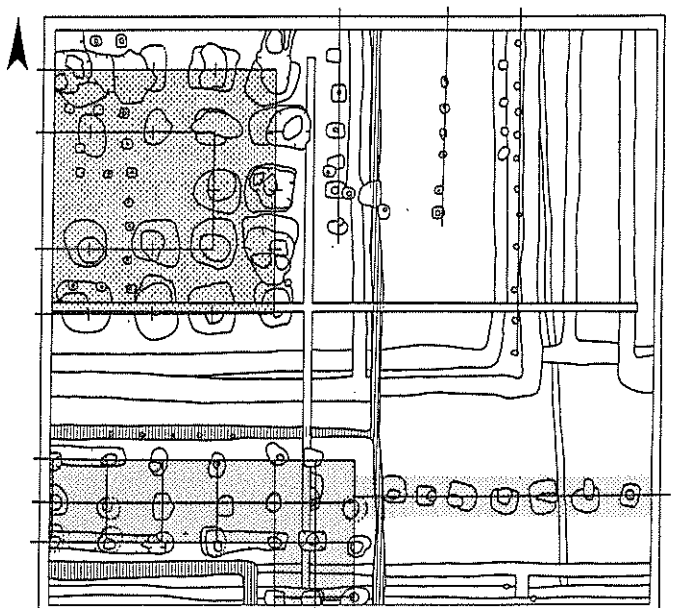
II



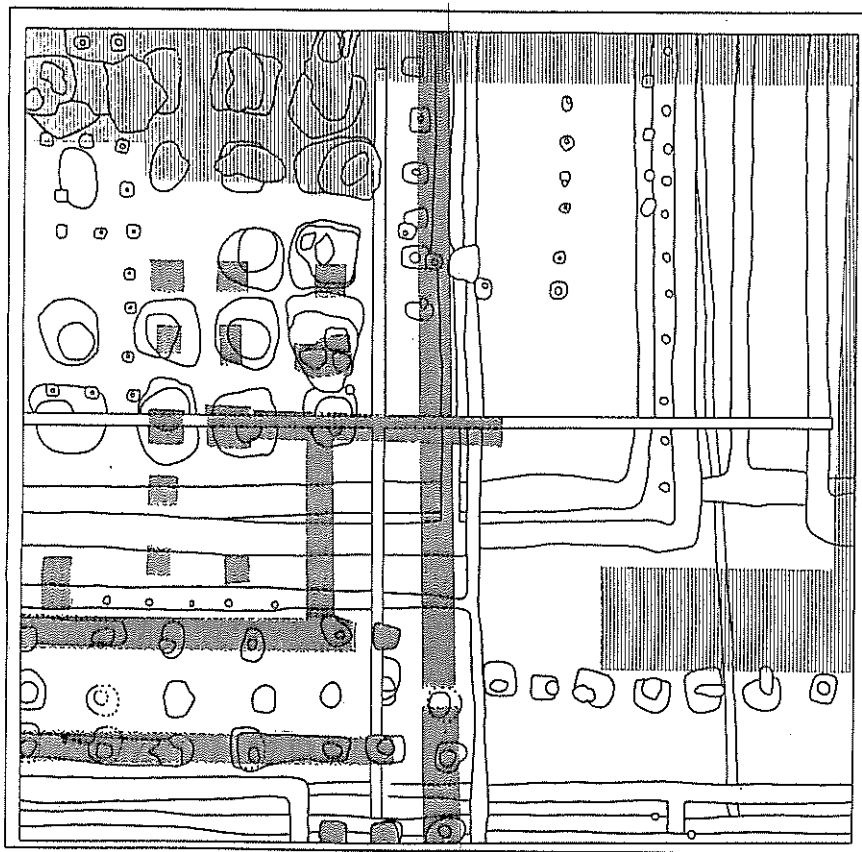
III



IV

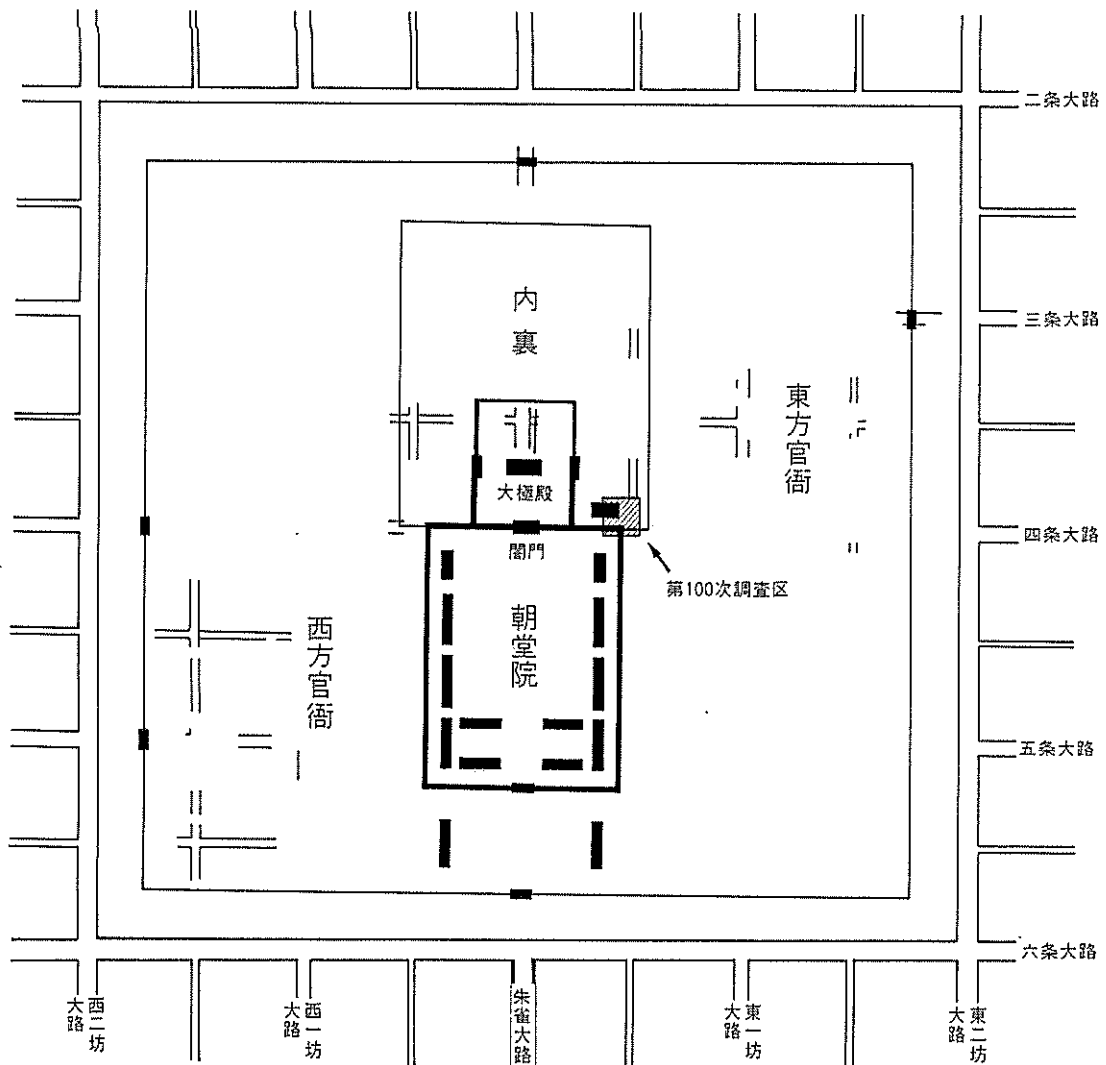


遺構變遷圖



既発掘トレンチ

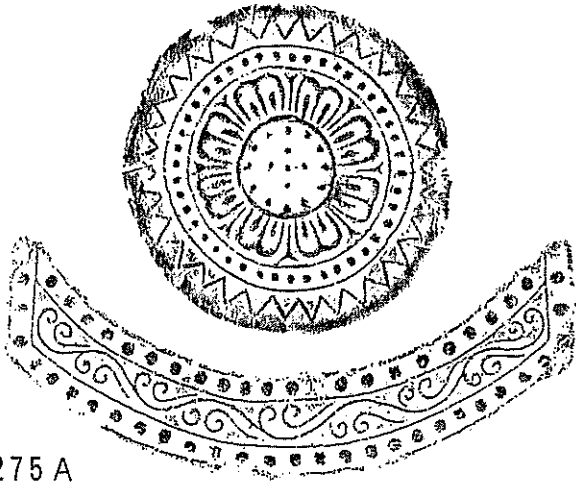
古文化研究所トレンチ 2次調査区



調査区の位置と宮内先行条坊

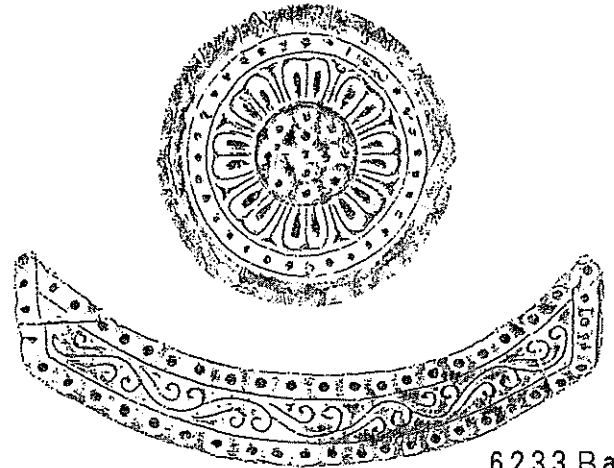
【藤原宮・京造営関係略年表】

676	天武 5	是年	新城に都つくらむとす。限の内の田園は公私を問わず皆耕さず、悉く荒れぬ。然れども、ついに都つくらず。
682	11	3/1	宮内官大夫らに命じて、新城に遣して、その地形を見しむ。よって都つくらむとす。
682	11	3/16	新城に幸す。
683	12	7/18	天皇、京師を巡行す。
684	13	3/9	天皇、京師を巡行し、宮室の地を定む。
690	持統 4	10/29	高市皇子、藤原の宮地を観る。
690	4	12/19	天皇、藤原に幸して宮地を観る。
691	5	10/27	使者を遣して、新益京を鎮祭せしむ。
692	6	1/12	天皇、新益京の路を観る。
692	6	5/23	難波王らを遣して、藤原の宮地を鎮祭せしむ。
692	6	6/30	天皇、藤原の宮地を観る。
693	7	8/1	藤原の宮地に幸す。
694	8	1/21	藤原宮に幸す。
694	8	12/1	藤原宮に遷居す。
695	9	1/7	公卿大夫を内裏に饗す。
698	文武 2	1/1	天皇、大極殿に御して朝を受く。
701	大宝 1	1/16	皇親及び百寮を朝堂に宴す。



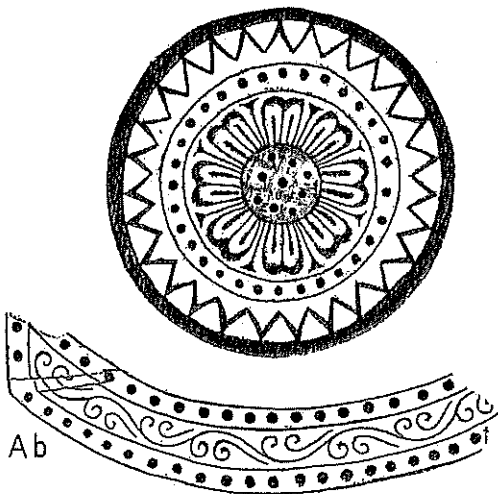
6275 A  
|  
6643 C

礎石建物所用瓦

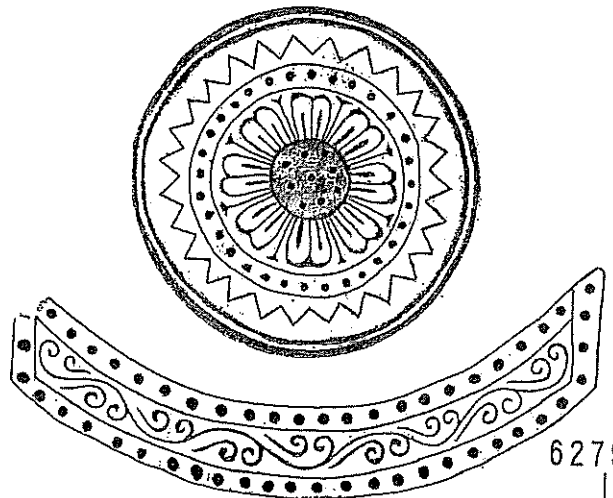


6233 Ba  
|  
6642 A

推定朝堂院回廊所用瓦



6279 Ab  
|  
6643 D



6279 Aa  
|  
6642 C

第100次調査出土の主要な軒瓦